50

レアルド・コロンボ『解剖学』におけるヒトと動物

澤井　直

レアルド・コロンボ（c. 1510—1559）の唯一の著作『解剖学』（De re anatomica, 1559）を読むには、ヴェサリウスの『人体構造論』（De humani corporis fabrica, 1543）を傍らに置いておく必要がある。一つには『解剖学』には図版が載っていないためであるが、もう一つにはこの著作を歴史的に位置づけるにはヴェサリウスとの関連を論じざるを得ないからである。

ヴェサリウスは、ガレノスの方法に倣い、自ら解剖を行い、人体そのものからより正確な知識を得ることを望んだ。そして実際に人体を解剖するなかで、ガレノスの記述とは異なる事例を見出していったのである。ヴェサリウスはガレノスの方法を貫いた結果、ガレノスを越えたのである。

ヴェサリウスはガレノスにおける問題点を多く指摘したが、その一つに、サルの解剖から得た知識をヒトにも適用していたということが挙げられる。ガレノスにおいては、記述される知識の対象と解剖という操作の対象とが一致していなかったのである。ヒトについての記述でありながら、実際はサルについての記述でしかなかったことをヴェサリウスは指摘するのである。

ヴェサリウス自身は、その著作においては記述の対象と操作の対象を一致させることを心掛けた。しかし、その彼をしても批判を免れることはできなかった。しかも自らがガレノスを批判したときと同様に、動物の筋肉の構造をヒトと関連づけたという批判を受けたのである。この批判を行ったのはレアルド・コロンボである。

従来コロンボの業績自体が評価の対象となることはあまりなかった。例外的に肺循環の発見は高く評価されているが、ハーヴィによる体循環の発見の先駆者として扱われるのがほとんどである。またコロンボが新解剖学の権威者ヴェサリウスに対して前述のような辛辣な批判を行ったことは、選手権争いにおいて他人の業績を横取り

した疑いと絡められ、彼の人格面での評価を低くしてきた。

しかし、ヴェサリウスによってなされた解剖学の革新という文脈の中で前述のようなヴェサリウス批判を考察するならば、コロンボによる批判もヴェサリウスが用いた方法論の枠組みの中にあることが分かる。つまり両者とも記述の対象と操作の対象を一致させるということに気を配り、権威者の言の中に不一致を見出した場合は、それを指摘することをためらわなかったのである。この点でコロンボによる批判はヴェサリウスがガレノスを訂正した時点で運命づけられていたと言えるのである。

コロンボは、人体を解剖し、ヒトについての知見を記述することに努めていたが、動物とヒトを関連づけることはなかったとは言えない。人体に対して行えない操作、すなわち生体解剖を行う際には動物からヒトへの類推を行わざるを得なかったのである。

コロンボの影響を受けたハーヴィは生体解剖を多く行い、「動物」の体循環を明らかにした。ハーヴィにおいては操作の対象は個々の動物であり、記述される対象は「動物全般」であった。

ではコロンボはどうだったのだろうか。彼によるヴェサリウス批判を見ると、ヒトを記述するにはヒトを操作すべきだと言われているだけで、ハーヴィのように動物全般を視野に入れているわけではない。むしろイヌの解剖からはイヌについての知識が得られるだけであろう。

本発表では、生体解剖においてコロンボがヒトと動物とをどのようにして関連づけていたか、またそれは彼自身によるヴェサリウス批判と矛盾していないかについて論じたい。

（京都大学大学院文学研究科博士後期課程）